



イギリス科ニュースレター No.16 / October 2008

東京大学 教養学部 地域文化研究学科 イギリス分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 402号)
TEL/FAX 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
e-mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp
website: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/blog/>



ホームカミング・デイのお知らせ

東京大学は、11月15日(土)にホームカミング・デイを開催します。例年と同様に、キャンパス全体のイベントのほか、イギリス科研究室(8号館402号)では午後4~6時頃にかけて、現職の教員スタッフと学生たちが集まり、ワインや軽食などを用意して卒業生の方々をお迎えいたします。みなさまのお越しを心より期待申し上げます!是非お誘い合わせのうえ、足をお運びください。イギリス科の懇親会については、研究室(助教の伊藤)までお問い合わせください。ブログでも随時情報を更新・発信いたします。

なお、駒場キャンパスの全体レセプションがファカルティハウス(旧同窓会館)にて午後5時30分より開かれます。こちらのみ参加費4000円と事前予約が必要になります。レセプションについては、教養学部の総務課総務係(03-5454-6013)までお問い合わせください。

主任挨拶

齋藤兆史(イギリス分科主任)

今年の4月、安西信一前主任からイギリス科主任の職責を引き継いだ。それ以前から山本、木畑、中尾と名主任が続いているだけに、改めて任の重さを感じている。早くも押しつぶされそうである。

もともとは英文学が専門と言っても、主にそれを語学的な関心で読んできたためか、はたまた想像力が貧困であるためか、イギリスの文化・歴史事象からその土地の匂いを鮮烈に感じたことはあまりなかった。ブリティッシュ・ハード・ロックに熱を上げ、ロック・ドラマーになろうとしていた学生時代は(本当だぞ)、リッチー・ブラック

モア率いるレインボーの名曲*Kill the King*を熱唱していたけれども、現実の英国史上の生々しい政権交代劇を連想したことはない。

しかしながら、昨年5月、放送大学の教材を作るためにイギリスを訪れた際、頭の中の知識と土地の匂いが結びついた。取材で回った場所がよかったのか、これでも少しは賢くなったのか、ああ、ここでこんなことが、そういえばあの土地であんなことが起こっていたのだなあ、としみじみと感じた。

土地の匂いとともにもそんな感動を与えてくれた場所の一つがイングランド南東部のヘースティングズ。言わずと知れた1066年のノルマンの征服を可能にした歴史的な戦いの舞台である。厳密に言えば、イギリス軍とノルマン軍がぶつかりあったのは、ヘースティングズの北東16キロほどのところにある場所で、のちにその地は戦いにちなんでバトルと名付けられ、いまでは一つの町として栄えている。まずはヘースティングズの海岸からフランス側を見やり、ここからノルマン軍の船が攻め入ってきたのかな、などと思いを巡らし、次にバトルの町に入る。

町の中央にある大きな石造りの門楼(gatehouse)をくぐると、そこにはヘースティングズの戦いの古戦場があり、その回りをぐるりと遊歩道が囲んでいる。その一カ所に掲げられた説明板によれば、戦い当日、ハロルド王率いるイギリス軍の隊列をなかなか破れずに苦慮したノルマン軍は、途中から戦略を変え、退くと見せては深追いをしてきたイギリス兵を取り囲んで殺害し、陽動作戦によって一日でイギリス軍を打ち破ってしまったという。ウィリアム征服王は勝利を記念してその地にベネティクト会の修道院(Battle Abbey)を建てた。その祭壇は、ハロルド王が首を切られた場所に作られた。英語・英文学の教師として、古英語

から中英語への変化を何度も教室で語ってきた。ノルマンの征服によって支配者の言語としてのノルマン・フランス語が大量に英語に流入し、英語の素質をもたらしたのだ、と。また、サー・ウォルター・スコットの小説『アイヴァンホー』(1819)を授業で読む際には、物語の中に現れるサクソン対ノルマンの対立の図式を説明するためにヘースティングズの戦いの話をしたものである。しかしながら、古戦場を目の当たりにして脳裏に浮かんできた戦いの映像は、それまで自分が偉そうに語っていた史実としての戦いとはまったく違うものであった。

英国研究、そして英連邦・広域英語圏に関わる地域研究をする学生諸君には、ぜひとも自分の研究と関係のある土地を訪れてほしいと思う。それまで頭の中に文字や図式で収まっていた事象が、途端に色と形と匂いを帯びてくるだろう。

いま、密かに次の長期英国滞在の機会を狙っている。どこに拠点を置くかは決めていないが、いままで自分が偉そうに講釈してきた事物にゆかりのある土地をできるだけ多く回ってみようと思う。

というようなわけで、じつはイギリスのことなどろくに知らない無学な主任ではあるけれども、学生諸君や同僚の力にすがって何とか任を全うしたいと考えている。よろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶

伊藤航多(地域・助教)

2008年4月から大学院・地域文化研究専攻(イギリス)の助教に就任しました。時が経つのは速いもので、これでイギリス科研究室との縁も11年目になります。

もともと本郷の文学部（西洋史学）を卒業しましたが、大学院からは駒場で草光俊雄先生のご指導を受け、イギリス近代史を勉強してきました。2003年8月からはイングランド中部のレスター大学に留学し、ヴィクトリア時代の市民文化についての研究で博士号を修め、昨年2月に帰って参りました。

留学中、苦しい時期にイギリス科の仲間を支えられました。リサーチのためニューカッスル・アポン・タインに半年以上滞在したときは非常に寂しい思いをしていたのですが、そんなお遊びに来てくれたイギリス科の藤田、井口両氏とハドリアヌスの長城を歩き、ダラム大聖堂の塔に登ったのは忘れられない思い出です。また、論文執筆で単調な生活を送っていたなかで、私と同時期にケンブリッジに留学していた新広記氏と計画し、イギリス科の留学生一同でW・モリスゆかりの「レッド・ハウス」を訪れたのも、良い気晴らしになりました。

助教として勤めて半年が経ちますが、学生たちのなかにイギリス科としての連帯感、良き伝統が受け継がれているのを折にふれて感じます。そういう場に今しばらく留まれることを感謝しつつ、今後ますます精進していきたいと思えます。よろしく願いいたします。

留学生便り

澤田望（地域・博士課程）

2006年9月からバーミンガム大学に留学しております。

私の研究テーマは、19世紀後半から20世紀初頭のナイジェリア南西部における記念事業、農業、労働組合、帝国に関わる任意団体活動を追いながら、アフリカ人エリートの社会生活や大英帝国の役割を考えようとするものですが、留学前から一度はアフリカのことをじっくりやってみたいと思っていたため、イギリスでは歴史学学部西アフリカ研究所の博士課程に在籍し、イギリス史から少し離れた生活を送っております。私の学科では、院生の大半が現代の西アフリカを研究対象とし、長期のフィールドワークに行うため、私もその流れに乗り、昨年2ヶ月ほど単

独でナイジェリアに滞在しました。

衛生・治安の面での不安も大きかったものの、アフリカ経験豊富な指導教官のアドバイスを聞き、そのネットワークに助けられながら、滞在の大部分はナイジェリア南西部にあるイバダン（Ibadan）大学の国立史料館に通い、そのほか数日間をナイジェリア最大の都市ラゴス（Lagos）と、オショボ（Oshodgbo）という内陸部で過ごしました。その間、ラゴスにて警察に車を占拠されて賄賂を要求された以外は危険な思いをすることもなかったのですが、空港からホテルに向かう車内とラゴス～イバダン間は、ライフルを持った武装警官が助手席に同行しての移動であったため、初めはそれだけで身が縮まる思いでした。

人口約250万のイバダンはラゴスに次ぐ大きな街ですが、ナイジェリア自体、通常海外の観光客が訪れる国ではないため、アフリカ系以外の人種を目にすることが珍しいのか、どこを歩いても周りから白人を意味する「オイボ（Oyinbo）」（特に蔑称ではありません）と叫ばれて挨拶されていました。

食事は、キャンパス内の汚い食堂で、キャッサバ、ヤム芋、メイズなどを杵でついて餅状にした主食と、トマト・玉ねぎ・ヤシ油・唐辛子のシチュー、そして揚げた肉か魚というセットを100円ほどで食べていたのですが、お腹の調子が悪くなったのは最初の一週間のみで、その後2ヶ月間、大量の炭水化物と油、ほんの少しのたんぱく質と野菜というメニューを、手でぐちゃぐちゃと練りながら楽しんでいました。

肝心の史料収集とはいうと、高温多湿の気候と設備不足のため保存状態が想像以上に悪く、一日に何度も何度も起こる停電のたびに、大学内のコンピューターは全てダウンし、図書館は真っ暗になって書庫から本を出しても見えませんでした。閲覧室ではアーカイブストのためのテレビかラジオが常にかかっている上、金銭の交渉にも気を使わなければならない、効率よく仕事を進めることは難しかったのですが、イギリスでは手に入らない現地の書簡を実際に目にすることができ、非常に感激しました。

大気汚染と砂埃で一日来たTシャツ

を洗う水が文字通り真っ黒になってしまふ環境の中、不安定な電気と水の供給に一喜一憂し、陽気ではあるものの殺気立った（ようにみえる）人々の中で過ごした2ヶ月は思った以上に強烈だったのか、イギリスに帰国直後は「一生分の勇気を使い果たした」とぐったりしておりました。

しかし、現在では、鮮やかな民族衣装に身を包んだ人々が、ヨルバ語で会話しながら頭に大量のものを載せて運んでいる情景を目にし、一度でも現地に身をおくことができ幸運であったと思っております。

イギリスでの院生生活につきましては、学部生40人、大学院生20人強の小さな研究所の中で、英語を母国語としない学生が私一人であるため、最初はセミナーのディスカッションについていだけで精一杯でしたが、その暖かい雰囲気にも救われることもしばしばです。

ご存知のように、イギリスの博士課程の学生は基本的にゼミを取る必要がなく、指導教官の下でそれぞれの研究を進めるのですが、私の場合は指導教官との面談のほか、1年目には2週間に1度のReading Groupと月1で開催される5時間のセミナーに出席し、2年目は、ヨルバ文化・言語の授業を聴講しつつ、1880-1920にナイジェリアで出版された新聞のマイクロフィルムを読み、少しずつ書く作業を進めようとしております。

生活面では、他の街に比べて素敵さには欠けるものの、程よく都会なバーミンガムでの生活にはすぐに慣れることができました。しかし、昨年9月にそれまで住んでいた快適な寮から引越し、ハウスシェアを始めたため、生活リズムや家事の分担に関する意見の相違など、家賃が安くなった分ストレスを感じてしまうこともあります。

日本の博士課程の方とも、こちらのネイティブスピーカーの学生とも違うペースで勉強する自分に不安を感じることもありますが、一次史料が身近にあるイギリスで、イギリス科の先輩や先生を含む周りの方々に支えられながら勉強を続けていくことができる環境に感謝しつつ、今後も一つ一つ進めていくつもりです。